書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

現代意訳　華厳経

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

現代意訳

華厳経

原田霊道訳著

書肆心水

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

目次

解説……一六

寂滅道場会

第一　世界の喜び（世間浄眼品）……三六
第二　信仰の対象（盧舎那品）……四二
蓮華蔵世界と普荘厳童子　四七

普光明殿会

第三　仏陀の名称（名号品）……五〇
第四　四諦の命辞（四諦品）……五三
第五　仏の光明（如来光明覚品）……五六
第六　疑問の解決（菩薩明難品）……六〇

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

第七　信仰の実際化（浄行品）……六四
第八　信仰の力（賢首品）……六六

忉利天会

第九　妙勝殿の集い（仏昇須弥頂品）……七二
第十　理解の生活（妙勝殿上説偈品）……七三
第十一　理解の階梯（十住品）……七六
第十二　発心と真証（梵行品）……七九
第十三　仏道志願の力（初発心功徳品）……八〇
第十四　理解より実行へ（明法品）……八三

夜摩天宮会

第十五　体験の生活（夜摩天宮自在品）……八六
第十六　体験の力（菩薩説偈品）……八七
第十七　体験の過程（十行品）……九〇
第十八　体験の内容（十無尽蔵品）……九六

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

兜率天宮会

第十九　兜率天の集い（一切宝殿品）……一〇〇
第二十　仏徳の讃頌（菩薩雲集讃仏品）……一〇一
第二十一　回向の生活（金剛幢回向品）……一〇五

他化自在天会

第二十二　真証の生活（十地品）……一一四
序　事
摩尼宝殿の集い　一一五
聖者金剛蔵の霊徳　一一六
正法の尊貴　一一八
仏の加護　一二二
一　入道の喜び（歓喜地）
無限向上の学道　一二六
入道の喜び　一二七
心地の浄化　一二八
聖者の十大願　一二九

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

布施の徹底　一三三
真証の第一相　一三六
二　三業の浄化（離垢地）
会衆の讃仰　一三八
十種の真実心　一三九
十種の善道　一四〇
三乗の十善道　一四一
十悪の思念より救済へ　一四二
真証の第二相　一四五
三　真相の達観（明地）
会衆の讃仰　一四六
十種の深心と現象の達観　一四八
求法の熱誠　一四九
八種の精神修養法　一五一
真証の第三相　一五三
四　真智の熾烈（焔地）
人天の讃仰　一五五
十種の実体観　一五六
三十七科の修養法（三十七道品）　一五六
精進の種々　一五八
真証の第四相　一五九
五　霊徳の増勝（難勝地）
会衆の讃仰　一六一

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

現象の平等　一六二
四種の真理（四諦）　一六三
教化の手段　一六五
真証の第五相　一六六
六　自由の顕現（現前地）
会衆の讃仰　一六八
十種の平等観　一六九
万有の生成観（十二因縁）　一七〇
三種の自由境（三解脱門）　一七四
真証の第六相　一七六
七　霊能の発揮（遠行地）
会衆の讃仰　一七八
十種の妙行　一七九
諸地の比較　一八一
無限の霊能　一八四
真証の第七相　一八六
八　無慾の活動（不動地）
会衆の讃仰　一八八
真理の体得　一八九
無慾の活動　一九〇
国土の浄化　一九二
生類の浄化　一九三
万有即ち仏身　一九四
智徳霊能の優越　一九五

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

不動の名に就て　一九六
真証の第八相　一九七
九　完全なる智慧（善慧地）
会衆の讃仰　一九九
教導者の学行　二〇〇
教化の完全　二〇四
万霊の大指導者　二〇六
真証の第九相　二〇七
十　霊光洋々（法雲地）
会衆の讃仰　二〇九
学行の成就　二一〇
仏位継承の儀　二一一
霊光洋々　二一四
法雲の名に就て　二一六
仏と聖者の霊能　二一七
真証の第十相　二二一
海と山と摩尼珠との喩え　二二二
聖者の証明　二二五
第二十三　真証の徳能（十明品―住処品）……二二六
十種の知力（十明品）　二二七
十種の智体（十忍品）　二二九
数量と徳能（阿僧祇品）　二三〇
時（寿命品）　二三二

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

処（住処品）　二三三
第二十四　仏陀の聖徳（不思議品―小相品）……二三三
仏のみすがた（如来相海品）　二三八
仏の光明（仏小相品）　二四〇
第二十五　普賢の学行（普賢行品）……二四三
第二十六　正覚の内容（性起品）……二四六

普光明殿会

第二十七　普賢の復説（離世間品）……二五三

重閣講堂会

第二十八　真理体得の道（入法界品）……二六一
祇園精舎の集い　二六二
求道の旅　二六四

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

本書の表記等について

一、本書の底本は、原田霊道訳著『現代意訳　華厳経』大正十一年三月、仏教経典叢書刊行会発行（非売品）である。

一、底本は旧漢字・旧仮名遣い表記であるが、本書では新漢字・新仮名遣い表記に置き換えた。別体扱いの漢字は標準字体で統一的に表記した（例、慚→慙）。

一、送り仮名が現今一般の感覚で読みにくいと考えられたものは適宜現代風に加減した（例、名ける→名づける、明か→明らか）。送り仮名の不統一があっても、さほど読みにくいと思われないものはそのままにしてある（例、尚／尚お）。

一、踊り字（繰り返し記号）は「々」のみを使用した。

一、底本の印刷欠字は□であらわした。

一、底本の読み仮名ルビのほかに適宜読み仮名ルビを補った。底本にある読み仮名ルビはすべて採用してある。

一、正誤を判断しかねる記述などに用いる、原文のままを意味する「ママ」のルビと校閲的註記は、（　）で括って（ママ）のように表記した。

一、些細な不統一はそのままとした（例、いんだら／いんどら）。

一、底本で丸括弧内が小活字になっているところはその通りに表記した。

一、底本では「波羅密」「婆須密多」の表記であるが、これは「波羅蜜」「婆須蜜多」と表記した。

一、現今一般に漢字表記が避けられて難読扱いとなったと考えられるものは平仮名表記に置き換えた。置き換えたものは五十音順に次の通り（送り仮名は代表例のみを示す）。

亜細亜（→アジア）、聊か（→いささか）、愈々（→いよいよ）、況や（→いわんや）、印度（→インド）、茲（→ここ）、此の（→この）、之れ（→これ）、是れ（→これ）、此れ（→これ）、抑々（→そもそも）、屢々（→しばしば）、乃ち（→すなわち）、乃で（→そこで）、其（→その）、仮令（→たとい）、勿れ（→なかれ）、亦（→また）、若し（→もし）、齎す（→もたらす）、纔か（→わずか）

SAMPLE/
Shosai-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

現代意訳

華厳経

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

原田霊道 訳著

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

凡例

一、華厳経は仏教の経典の中で、最も浩瀚なもので、然も殆ど象徴寄顕の表現形式をもって終始しているから、その帰趣を捉えにくい。卒然としてこれに接する時は、荒誕無稽の夢物語を見るの感がある。然し精読沈思一たびその表現せんとする経の原意に触るれば、その雄大な結構と高遠な哲理と深刻な宗教的体験とに思わず、驚異の眼を睜(みは)るであろう。いま訳する処は量に於て二十分の一にも足らず、ただ結構梗概を述ぶるに止まって、殆ど中心の思想さえ現わし得ないことを心から遺憾とする。

一、本書は「六十華厳」に拠り、「十地品」を中心として、前後の各章は同品の内容を補い、一経の梗概結構を示す程度に、極めて大胆な抄訳を行った。故に「十地品」は前文を繰り返す偈を除く他は、殆ど漏さず訳した。「四十華厳」の最後の一節は経の中心思想に重大な関係があると信じて、これを終りに附加しておいた。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

一、観察体験の浅深精粗を表わす三昧や、宇宙の実体即ち仏身を表現する種々の相を訳することを避けながら、無限無尽を表わす十数を、時に略するなど、態度の不統一は訳文の拙劣と共に、筆者自身も鮮なからず不満足である。

一、本経典は一面、偉大な象徴文学で、言々句々に深大な意義を含ましてあるから、本書の如き形式が、経の精神を現わすに不適当であることは言うまでもない。筆者は自己のその器にあらざることを告白して、本書が玉を瓦としたことを衷心より慙愧している。

本書に就ては文学博士椎尾弁匡先生が深い同情をもって、種々御指導下さいました。本書が幾分でも本叢書刊行の趣意に副うところがあれば、それは総て先生の指導の賜である。ここに謹んで感謝の意を表する。

大正十一年二月

原田霊道 識

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

解説

一

華厳経は釈尊自覚の内容を明らかにする経典である。故に釈尊の成道を主題として成道後二七日に菩提樹下寂滅道場を始め、七処に於て説かれたとするのは表現の一形式で、実は宇宙に遍満して、時処に束縛せらるべきものでない、万象はすべて華厳経の内容を語るものである。

華厳経の精神を最もよく発揮した賢首は、この旨を明らかにする為めに、華厳経に広略六種の別（著書によって異なる、今は「探玄記」に依る）を見て、その内容の広漠なることを示した。その始めの「恒本」は、宇宙を挙げて常恒不断に仏の正覚を語るものとして、山川河海を悉く仏陀正覚の内容即ち華厳経とするのである。これが真の華厳経で、仮りに文字に表わして大本、上本、中本、下本、略本等とするも、その下本にしてなお十万頌もあり、支那に翻訳された吾々の手にする六十巻、八十巻の経は最後の略本であると。もってその内容を知ることが出来る。この経典論は最もよく仏教経典の本

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

質を表わしたもので、華厳経に限らず総ての大乗経典に就て論ぜらるべきことである。

華厳経が宇宙の全的活動を内容とする仏陀の自覚を顕現するものとすれば、その内容は念々に拡大され、充実さるるもので、決して六十、八十乃至十万頌に限らるべきものでない。故に華厳経は単に第一説法として、釈尊一代の教説を該摂するのみでなく、未来永劫を尽して、人類救済の指導たる思想は悉く仏陀の自覚としてこれを包含するものである。

これ文字に表わし、口に述べるときは、その意義を限定するものであるから、これ等によって無限の内容を説明することは出来ない。この意味は経典の至る処に現わされて、仏は一事項の説法を終る毎に、必ず「無量の時を費すも、遂に説き尽されない」と繰返してある。故に吾々は華厳経を読み、これを体験するに、「これぞ華厳の内容、これぞ仏陀の自覚」なりと、限定的に思惟してはならぬ。すべての経典は「恒本」華厳経の片鱗隻影なりと思うべきである。

二

華厳経は詳しくは「大方広仏華厳経」と云い、原名をマハーバイプルヤ・ブッダ・ガンダ・ビューハ・スートラ（Mahavaipulya buddha ganda vyūha sūtra）と云う。西蔵訳にはアバタムサカ（Avataṁsaka）とし、ニポールの本はガンダビューハ（Gaṇḍa-vyūha）となっている。

大方広には種々の意義を含むも、要するに広大無限の意味、仏は理想を示し、華は自性清浄の心（大宇宙の実体）を表わし、厳は実行体言すること、故に「無限広大の宇宙の実体を学行し、体現するみ

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

教え」と云うことである。

この経典の成立年代に就ては明確の知識をもっていない。ただ釈尊の滅後、五百年頃（西暦第一世紀）より盛んに行われた仏教の復興運動に伴う産物であることは想像される。釈尊の滅後、流れを汲むものの情として遺法を重んじた結果は、表面の規律に拘泥してその精神を忘れ、ただ遺法の分析解釈を事とするに至った。次でこの仏説細分の結果は知識の分析を重んじ、現象の分析論議によって宇宙人生の総ての問題を解決し得るものとして、遂に仏教の本質である成仏さえ否定するに至った。これが哲学的にも宗教的にも仏教を偏狭に低級にした所謂小乗教である。この偏執を打破し、仏陀の真精神を発揮せんが為めに、大乗仏教の復興運動は起り、而して幾多の経典論書の著述編纂は行われたのである。本経典の如きもその時代の偉大な仏教の思想家が仏教の本義を明らかにせんとして、仏陀自覚の内容を開顕せられたものであろう。

この経の成立地に就ては支那翻訳の歴史より推論して、于闐（うてん）（Khoten）と云われているが、于闐国の歴史及びその仏教を語る唯一権威である西蔵文于闐国史（西紀一一八三の著述）には、何等華厳に関する記述を見ない。果して何処にて成れるや浅学の身の知るよしもない。

三

華厳経の支那翻訳は仏教が伝わって（西紀六七）間もなく、支婁迦讖（翻訳期間西紀一四七―一八六）によってなされた経の「名号品」に当る兜沙（とした）経の訳出に始まる。爾後数代に亘って行われ、賢首

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

の「華厳伝」（華厳の歴史）には三十五部の多数が列挙してある。然しこれ等は経の一章（品）又は一部分の抄訳で、完本ではない。その現に存するもののみが、二十四部もある。いまは煩を避けて華厳経の中心をなす「十地品」と「入法界品」との異訳を挙げよう。

漸備一切知徳経	五　巻（十地品）	西晋	竺法護
十　住　経	十三巻（同上）	西晋	聶道真
十　住　経	四　巻（同上）	後秦	鳩摩羅什仏陀耶舎
仏説十地経	九　巻（同上）	唐	尸羅達摩
羅摩伽経	三　巻（入法界品）	西秦	聖堅
文殊師利発願経	一　巻（同上）	東晋	覚賢
大方広仏華厳経入法界品	一　巻（同上）	唐	日照
華厳経普賢行願品	四十巻（同上）	唐	般若三蔵
普賢菩薩行願讃	一　巻（同上）	唐	不空

完本の訳出は前後二回のみである。

一、大方広仏華厳経　六十巻

北天竺の人、仏駄跋陀羅（ぶっだばつだら）Buddhabhadra—覚賢（西紀三五九—四二九）が、楊都道場寺に於て、義熙十四年三月（四一八）に業を始め、元熙二年六月（四二〇）に訳了した。

二、同　　八十巻

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

于闐の人、実叉難陀（じっしゃなんだ）Śikṣānanda—学喜（西紀六五二—七一〇）が京都大遍空寺に於て、唐の証聖元年三月（六九五）に訳を始め、聖暦二年十月（六九九）に了る。

前者を「六十華厳」、又は「晋経」と云い、後者を「八十華厳」、又は「唐経」と云う。「四十華厳」と云わるるものは支本で、前に掲げた「入法界品」の異訳中、般若三蔵訳の「華厳経普賢行願品」を指し、完本ではない。これをまた「貞元経」と云い、ニポール国の九部大経中の華厳経はこれである。

華厳経の原文としては今僅かにその一部分しか残って居らぬ。完全のものとしては十地品 Daśabhūmīśvara と「入法界品」Gaṇḍavyūha 丈で、それに後者の結文である六十二頌の「普賢行願賛」Bhadracari praṇidhāna が単行本として現存して居る。然し一部分としては「賢首品」の大部分の偈頌が「大乗集菩薩論」Śikṣā Samuccaya の中に引用されて、原文の俤（おもかげ）を窺うことが出来る。

これ等原文の古写本は、パリの国立図書館（ビブリオテク・ナシオナル）や英国の皇立アジア協会文庫、ケムブリジ大学文庫、カルカッタ・アジア協会書庫等に多数珍蔵され、就中（なかんずく）英京アジア協会蔵の「行願品」梵本は西暦十世紀頃の書写で非常に有名なものである。吾国にも東京及び京都の大学に高楠榊両教授の尽力でこの二品の梵本が備えられるに至った。

西蔵蔵経の経部に於てもこの経の訳本が、該部第三門 Phal-chen として六函二千二百葉の浩瀚な大冊となって収められて居る。新訳華厳（唐経）の三十九品に対し四十五品の分章であるから、内容は多少増減があることが分ろう。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

四

同じく完本なるに、晋経は六十巻三十四章、唐経は八十巻三十九章より成り、両経の巻帙章品に相違がある。また説法の会場に就ても前者は八会なるも、後者は九会である。これは唐経は晋経に於ける盧舎那品の一章を五章に開き、更に「十地品」の次に「十定品」の一章を加うるが故に晋経に比して五章を増加し、また十定品の始めに「普光明殿に於て」とあるによって、以下の十一品を十地品と別の一会として、九会とするのである。いま六十巻の経によってその組織を概観しよう。

本経典は説法と云わんよりも、仏陀の自覚の内容を戯曲的結構をもって、表現したものである。その結構は八場より成り、一場毎に主人公を異にしている。いまこれを図示すれば、

第一場	寂滅道場	二　章	普　賢
		（世間浄眼品、盧舎那品）	
第二場	普光明殿（一）	六　章	文　殊
		（名号品、四諦品、光明覚品、明難品、浄行品、賢首品）	
第三場	忉利天宮	六　章	法　慧
		（須弥頂品、妙勝殿説偈品、十住品、梵行品、初発心釈尊功徳品、明法品）	
第四場	夜摩天宮	四　章	功徳林
		（偈品、十行品、十無尽蔵品、夜摩天宮説）	
第五場	兜率天宮	三　章	金剛幢
		（一切宝殿品、菩薩讃仏品、十回向品）	
第六場	他化自在天宮	十一章	金剛蔵
		（十地品、十明品、十忍品、阿僧祇品、寿命品、住処品、不思議品、相海品、小相品、普賢行品、如来性起品）	
第七場	普光明殿（二）	一　章	普　賢
		（離世間品）	
第八場	重閣講堂	一　章	善　財
		（入法界品）	

SAMPLE
Shoshinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

説会としては、かく八場なるも、普光明殿は二回、使用されているから、所としては七処で、これを人三天四の七処と云い、通常、華厳経の説相を、晋経は七処八会、唐経は七処九会と云わるる所以である。

各場に活躍するあまたの人物は、悉く仏陀盧舎那（釈尊）の性能を人格化せるもので、当然、盧舎那仏に統一せらるべきものである。故に表面殆ど仏陀の活動と見られないが、その背景には常に法身盧舎那仏が活躍している。それは経典の一の事件を叙するに、必ず「仏の神力を承けて」と云うによっても、容易に首肯されよう。また人界より天界へと、場面の変化し行くのは、無限に真実を求めて止まぬ向上心の進展を表現するものである。

五

各章の梗概と前後の関係とは、その章の始めに簡短ながら述べたから省略してここにはただ一経の帰結に就て一言しよう。第一場は仏陀の正覚成就によって宇宙は新しき生命を得る、即ち宇宙を挙げて仏陀たるの相を明らかにし、第二場には信仰を讃えて発心求道を勧め、第三場には理解の法を説き、第四場には実行を、第五場には一切の行為の統一回向を述べ、第六場には真証の生活を明らかにし、第七場には信仰理解、実行、回向、真証の内容を再び概説し、第八場にはこれ等の聖者の学道を体現する善財童子の求道の旅が叙してある。すなわち要は信解行証の四に概括される。この叙述は浅深次第して絶対に対する吾々の向上進趣を明らかにするものである。華厳経が単なる哲学として観念の遊

SAMPLE
Shosui-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

戯に終るならば止まんも、常に宇宙万象をあげて仏陀たるの実感を主張し、発心求道の現実生活に正覚の円現を期する華厳経にては更に一歩を進めねばならぬ。絶対と吾人との合一は唯信仰の体現にある。故に「入法界品」の最後に、自他の無限の向上を永劫に念願し、修行する本願仏たる阿弥陀仏に帰依すべきことを教えたるは実に華厳経に千鈞の重きを加うるものである。これ宗教の実践としてはこの経を逆観せよと主張さるる所以である。

かくて信解行証の四は遂に自己の真実求道の一心に帰結さるべきである。真実求道の一心は内的には仏陀の自覚、仏陀の自覚は現われて宇宙の万象となる。即ち自他一切の差別、あらゆる隔歴不同を去り、自他相依り相助けて各々その生を完うする渾然たる一体としての大自然の活動、これが吾が一心となり、仏陀とならねばならぬのである。

寸時の撓みもなく、無限に自他の向上を念願し、実行するこの志願は、やがて、阿弥陀仏が一切の生類を摂取し尽さんとする本願である。実にこの無限向上の学道こそ、万有の永遠不滅の生命である、宇宙の本性である。ここに理想と現実との一致がある。

万有の協調偕和する法界の風光を掬するものは、そこに偉大な力を感じ、報恩感謝の無私の活動が現われる。

六

本経典は所謂法界縁起を説くものである。即ち一切の現象が互に鎔融して、無礙の関係を有するこ

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

とを、発現的（縁起）に見て、現象即実在論をして、その到る所に至らしめている。

元来、仏教の宇宙論には現象の生起の因縁順序を究明して宇宙の真相を明らかにせんとする縁起論と、本体の方面より考察して宇宙の何ものたるかを究めんとする実相論とがある。本経は正にその縁起論に属すべきものである。

同じく縁起論と云うもその中には、万有の生起する原因を吾人の意志行為に求むる業感縁起、又は主観的に一切を心識の顕現とする頼耶縁起、又は万有を真理実体の顕現とする真如縁起、又は現象を本体そのままの現われとして現象即実在と論ずる法界縁起、又は宇宙をその構成要素たる地、水、火、風、空、識の六大におさめ、これを人格視する六大縁起などがある。

宇宙の実相は本体の外に現象なく、現象の外に実体の論ぜらるべきものでない、即ち現象そのままが実体で、然も現象相互には無尽の関係がある。故に一塵一草も全宇宙一切の力の現われで、一物を挙ぐれば他の一切はこれにおさまる、所謂一即一切、一切即一である。この現象即実在にして然も相依り相成して無尽の関係のあることを明らかにするのが法界縁起論である。本経は実にこの法界縁起を高唱するもので、経の言々句々に皆この理が現わしてある。本経には一つも権道を説いてない、また法華経などの云う実体に帰納した上に真実を認むるのでもない。万有そのままが真実第一義で、互に鎔融することを主張する。されば全巻に亘って用いられてある表現形式を、単なる表現と見るのは真に経意に徴したものでない。表現そのままが真実なり第一義なりと知る時、真に華厳経の原意を体得することが出来る。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

法界縁起の究極は、到底吾々の知識を以て了解し得らるべきものでない、ただこれを体験の上に求むの外はないが、古来、用いられた説明法を簡短に述べて、経典色読の幾分のたよりとしよう。

七

吾々の目に映ずる現象は千差万別で、その間に何等の融和も協調も認むることは出来ない。然もこの万差の現象の上に無礙を説き、宇宙の全的躍動を論ずるは何故であるか。万有を隔歴不融と見るはその真相に徹しない浅見で、万有は実に、互に鎔融自在にして、一即一切、一切即一であるからである。

この一即一切の原理の説明は種々になされてあるが要は相即相入にある。万有は各々その体の上に空有の二義、作用の上に有力無力の二義がある。すなわち本体の上に相即を語り、作用の上に相入を説くのである。万有は平等の実体より縁起するのであるから、因縁の集散によって万有には各々空有の二義がある。彼此相対が有となれば、此は空となって彼に摂められ、此が有となれば彼は空となりて此に摂せられ、ここに一即一切の関係は成立する。

また、宇宙万有は一が有力なれば他は無力で、一切の現象は皆力の無有の錯雑関係によって成り、而してこの有力無力相対するところに相入がある。万有は相互に有力を因とし、無力を縁として相依り相助くるが故に、此が有力なる時は他の一切をこれに摂め、他が有力なる時はその他の一切をこれに摂める。即ち万有を大別して真如と無明とすれば、真如が有力で無明が無力なれば、清浄なる悟りの世界となり、無明が有力にして真如が無力なれば汚れある迷いの世界となる。かく彼此融渉して一

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

塵よく宇宙をおさめて狭からず、芥子に万有を入れて広くない。かくして無尽の縁起は行わるる。

八

この相即相入の原理を説明して全一起動の法界縁起を明らかにするものは十玄、六相の説である。十玄とは十重無尽の幽玄を現わすので、総、別、論理、譬喩、時間、空間の各方面より万有の無尽の関係を論ずるが、要は体の相即と作用の相入と万有相互の関係とを明らかにするものである。故に十門は捕われた分類で必然の形式でない。故に已に相即相入を述べた後に説くの要はないようだが、華厳とし云えば必ず十玄を思い浮かべる程、人々に膾炙せらるるが故に、簡短に十門の大意を述べよう。

一、同時具足相応門　これは十玄の総説で、時間空間を尽して、万有は同時に且つ完全に縁起相応するものである。

二、一多相容不同門　万有の作用より論じ、各自の相を壊らずして、一多相入することを明らかにする。万有相互の関係は、一室にあまたの光があるも、互に渉入して相礙えないようなものである。

三、諸法相即自在門　万有の体より見て、万有は相即無礙である。

四、因陀羅微細境界門　譬えをもって前の相即相入が一切万有の上にあることを述べる。因陀羅は帝釈天のことで、その宮殿の網に無数の明珠がある。その珠が重々無尽に映現するを相即相入の関係に譬えるので、これは経の中にしばしば用いらるる喩えである。万有も互に無尽の関係がある。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

五、**微細相容安立門**　相即相入無尽なるも、万有の独自の天地には増減はない。所謂一微塵に全宇宙をおさめ、芥子に須弥山を容れることが出来る。

六、**秘密隠顕俱成門**　万有は相即相入して各々の自体を壊らず、表裏となって同時に成立するものである。

七、**諸蔵純雑具徳門**　仏と凡夫とを問わず、万有万霊は斉しく万徳を具して、一行に一切行を完うし（雑）、一切行は総て一行成って（純）、然も混乱することはない。

八、**十世隔法異成門**　上の五門は空間的に論じたが、これは時間的に鎔融を見るので、初発心に成仏を説くが如きこれである。過去、現在、未来の万有は時間的に差別するが如きも、実は互に関聯して相離ることはない。

九、**唯心廻転善成門**　空間と云い、時間と云うも共に一心（一種の原理即ち理体で、心理学上に云う心より広く且つ高い）の活現である。

十、**託事顕法生解門**　これは智的関係を論ずるもので、幽玄なる事々無礙の法門も、現実の事実を離れて外に存するのでない。一華一葉一髪一草の上にも、万有の力を見、無尽の関係の現わさるるものである。

九

六相は本経典の第二十二章真証の生活の下に、（二三〇頁参照）聖者の修する学行が、一行に一切行を

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

完うする理由として挙げられたので、経典の上では、一切現象にまで及ぼされてない。然るに頼耶縁起論の創唱者世親Vasuvandhu（西暦第五紀の中頃の人）は「十地品」の注釈書である「十地経論」に広くこれを万有の上に論じた。次で華厳宗の第二祖智儼によってその深義が発揮され、更に賢首はこれを祖述し、一歩を進めて動的の説明に用いた。故に法界縁起を知るには必ず学ぶべき教理である。

六相とは、

一に総相、一物に宇宙万有を包含することを云い、

二に別相、万有の一体に該摂されて、然も各自の相を壊（やぶ）らないことを云い、

三に同相、万有の相に就て、互に調和して一相を成すことを云う、即ち共通性である。

四に異相、相の差別の方面即ち調和しながら各自の特質を失わない差別性を云い、

五に成相、万差の万有相依って全体を完成することを云い、

六に壊相、全体を完うしつつ、各自の特性を破壊しない。

六相は一体の六面観察で、総別はその体に就て、同異はその相に就て、成壊は縁起の作用に就て考察するのである。而して総、同、成の三は平等の方面を論じて万有の円融無礙なることを明らかにし、別、異、壊の三は差別の方面を論じて、法界の縁起の完全に行わるることを明らかにする。

この六相は互に相資助するもので、平等も差別を離れず、差別そのままが平等、平等そのままが差別であらねばならぬ。一切の事々物々は皆この六相を具えて互に融渉し、互融してその間に何等の障礙がない。かく万物相互の間には無尽の関係があるから、一法が動けば全法が動いて、一物の成立は

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

全法共同の力である。故に宇宙は挙げて一微塵に収まり、理の平等をまたずに、直に万有の互融を説くことが出来る。即ち一微塵に宇宙を摂(おさ)めて余りなく、一念に三世を収めて長しとしない。

この法界縁起は真妄迷悟の別なく、宇宙を挙げて、宇宙の実体たる盧舎那仏の活現とする。即ち大自然の活動、それが盧舎那仏である。故に斉(ひと)しく縁起と云うも相対的因縁関係の上に論ぜらるる縁起論とは大いに趣を異にする。されば法界縁起をその相対的縁起論と区別して、特に性起論と称えている。即ち現象の相対的に生起するを縁起と云い、宇宙人生を実体盧舎那仏の全活現なりと見るが性起である。性起即ち華厳経の見る宇宙は他の因縁を待って生起するものでない。瀑流の如く念々に流れ流れて止むことなき大自然の相が即ち宇宙の実体である。実体そのままの現われが迷悟、情非情の万象であるから、宇宙万有悉(ことごと)く仏身である。宇宙の実体である。この変化そのものを実体とする、即ち宇宙の本体、相状、作用が一体となって念々に生々躍動する宇宙の常相を一心法界と云う。華厳経が真に宇宙の真実を究め得るのは、この実在を動的に観て行くからである。

かくの如く万有を観察することによって、始めて、宇宙の真実相を究め、正覚は成就せらるる。すなわち法界縁起を説く華厳経は、仏陀自覚の内容を開顕するものである。

十

念々に創造し進化する世界の当相を宇宙の実体とし、その無尽の関係を達観する法界縁起観の実修の上には自ら浅深次第がある。仏教のあらゆる宇宙観は皆この法界縁起に到達する階梯である。この

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

従来、歴史的に現われた浅深種々の宇宙観を統一し、それに帰結を与えて、更に法界縁起を明らかにし、華厳経の修観を教うるものは澄観（西紀七三六―八三八）の四法界観である。

四法界とは事法界、理法界、事理法界、事々無礙法界を云う。これ宇宙の四面観である。

一、事法界観、「事」は差別で、唯万有の現象差別の方面のみを観察する単なる現象論である。

二、理法界観とは無差別平等の理体より観察すること。即ち差別の現象の根本たる本体を観じて、その平等を知るのである。

三、事理無礙法界観は現象と本体との鎔融無礙を観察するので、現象本体相関論の説くところを観察するのである。現象は本体より顕現さるるものなれば、両者は独立絶縁のものでない。

四、事々無礙法界観は華厳経の教ゆる法界無尽縁起を観察することである。即ち個々の事物の中に宇宙の重々無尽の縁起の現わさるるを説く現象即本体論の主張を達観することである。

この四法界観を実修する上には四法界は浅深次第し、またこれを観察する心、観察せらるる法界と相待するが如きも、事々無礙法界観の成就は、挙一全収して一々皆無尽の義を現わし、従って一心と法界とは不二一体となって、融通無礙である。これを一心法界観と云う。

更にこの一心法界観を明らかにする為めに十重唯識観なるものを説くも、畢竟（ひっきょう）、頼耶縁起観（前五重）より進みて、真如縁起（第六重）事理無礙（第七重）を経て、法界縁起の相入（第八重）相即し（第九重）無礙の関係（第十重）ありと説く法界縁起観を唯識的に観察して、一心法界の旨を明らかにするに外ならぬ。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

十一

かくの如く観察して宇宙の実体実相を達観するも、これが吾人の実生活に現われて来ねば、一種の観念遊戯に外ならぬ。華厳経の高唱するものは観念の生活ではない。体験の生活である。実生活の無礙自在にある。故に法界観の究竟は宇宙を挙げて、仏陀たらしむるにある。経に解境の十仏（一九五頁参照）を説いて迷悟染浄の別なく、万有総て仏陀なることを明らかにする所以はここにある。この万有即ち仏身の実感は吾々の日常生活に表わされねばならぬ。経に解境の十仏中の如来身を開いて行境の十仏（一九五頁参照）を説く所以はここにある。

吾々の実生活に仏徳を現わし、万有を悉く仏陀たらしむるものは、吾々の願行心である。即ち無限に向上を求めて念々に学行するところに仏陀は顕現し、仏力の偉大を感じて法界は挙げて仏陀の全活現と現われ来るのである。本経が無限向上の学道を力説する所以はここにある。この願行即ち無上の学道こそ永遠不滅の生命即ち仏陀の生活である。自他の無限の向上を本願とする仏陀、永遠不滅の生命を体とする仏陀それは阿弥陀仏である。阿弥陀仏は実に吾々が永劫に値遇を求めたみ仏である。

自他の無限向上を本願とする阿弥陀仏への邂逅はやがて成仏である。学行の成就である。善財童子が長い求道の旅に於て得た真の学道、成仏の道は実に阿弥陀仏の浄土を観ることであったろう。

有限と無限の一致、仏と生類との融合は、唯阿弥陀仏にまみえ、その本願を心として、無限に向上を求めて念々に学行することによってのみ完成せらるる。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

本経は十地品と入法界品とを中心とすると云う説はこの点から、詢(まこと)に所以あることである。

十二

華厳経のインドに関する記録は竜樹 Nāgārjuna（西暦第二世紀頃）の註釈である。竜樹は「大不思議論」十万頌を作ってこの経を註釈し、現に存する「十住毘娑婆論」十七巻（十地品の註釈）はその一部と云われている。またその著「大知度論」に引用せらるる「不思議解脱経」は本経を指すのだと云うが、その真偽は別として、華厳経は竜樹によって竜宮よりもたらされたと云わるる程、竜樹と華厳経の関係は余程、密接であったらしい。

その後、天親 Vasubandhu（西暦四二□(欠)—五〇〇）もまた「十地経論」十二巻を著して「十地品」を釈し、堅慧 Sthiramati 金剛軍 Vajrasēna 等も十地経（十地品）の註釈書を作ったと伝えられ、また起信論が馬鳴 Aśvaghoṣa（西暦第一世紀後半）の作とすれば、その組織がこの経の結構に類似するより推論して、全然無関係とは思われない。

支那に於ける華厳思想の伝播は、たとい一部分の訳出とは云え、兜沙経（名号品）の翻訳に端を開くものである。その後、本経の部分的（独立の経典として伝えられた）翻訳は簇出したが講学の見るべきものはなかった。覚賢によってその全部の翻訳が完成されて始めて、華厳の講学も漸く盛んに、覚賢の門下法業は「華厳旨帰」二巻を著わし、元嘉十二年（四三五）に来朝した求那跋陀羅 Guṇabhadra は特に華厳思想の弘布に力があった。かくして玄高、玄暢、智炬（華厳疏十巻）、霊弁（華厳論百巻）

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

など或は講じ、或は書を著わして、これが弘通に努め、華厳は漸く仏学者の思いをひそむるところとなった。殊に華厳思想の支那仏教の中に重きをなすに至ったのは、菩提流支 Badhiruci 勒那摩提 Ratuna-mati によって成された「十地経論」の翻訳（北魏永平四年西紀五一一）であった。この論は絶対唯心論を説き、地論家の一学派を開き、華厳宗開立の先駆をなした。

華厳の漸く重んぜらるると共に、独自の観察を重んずる経の本旨に基いて、華厳を中心とする実行家が現われた。それは華厳宗の第一祖とせらるる帝心尊者杜順（西紀五五七―六四〇）である。杜順は「五教止観」一巻、「法界観門」一巻等を著わして、華厳経の宇宙観実修の方法を明らかにした。次で、智儼（西紀六〇二―六六八）は広く当時の諸教学を修め、殊に十地、華厳を智正に学び、後ちまた杜順に受学して、事々無礙の教理を明らかにした。また一宗として仏教に対する独自の範疇（教判）を組織した。著に「捜玄記」五巻、「孔目章」四巻等がある。

智儼の思想を受け更にこれを組織し大成して、華厳経の真精神を発揮したものは賢首（西紀六四三―七一二）である。賢首は該博な識見と透徹せる頭脳をもってよく従来歴史的に発達し来れる大小の縁起論を調和し統一し、また従来の静止的観察を排して、動的に全的に宇宙の実体を論じ、而して教理と実際とを一致せしめて、克く華厳の真精神を明らかにした。華厳宗は賢首の偉大な学徳と則天武后の保護によって、当代を風靡した。著す所、「探玄記」二十巻（華厳経の註釈）、「五教章」三巻（教義の組織）妄尽還源観一巻（実行論）等を始め二十余部ある。

この偉哲賢首と殆ど時を同じゅうして、李通玄居士がいる（六三五―七三〇）。居士は「華厳論」六

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

十巻を著し経の実行的方面を明らかにして、独自の天地を開いている。

賢首の没後、その門下の第一人者、慧苑は「刊定記」十六巻を著わして、師説に背き、為めに宗義の混乱を来した。かく内には偉大な思想を継ぐ人材なく、外には武周の凋落するありて、昔日の盛観を持続することは出来なかったが賢首の思想を復興せるものは、清涼寺の澄観（西紀七三八―八三八）である。澄観は異義を排して正義の復興に努め、殊に実践的方面に於て宗風を宣揚した。また実践を重んずるの結果、禅風を加味するに至る「大疏」六十巻、「演義鈔」八十巻等の著述がある。その門下、宗密（西紀七八〇―八四一）は「円覚経大疏」六巻、「同略疏」四巻等を著わし、華厳と禅の一致を主張して、華厳の学行に帰一を与えた。その没後三年にして会昌三年の武宗の破仏が行われて他の諸宗と共に衰頽した。趙宋の代に子璿、浄源の復興運動はあったが、昔日の観はなく、殆どその跡を絶つに至った。

我国には聖武天皇の天平八年（西紀七三六）に、唐の道璿によって始めて、華厳の註釈書が伝えられ、同十二年に賢首の弟子審祥（新羅の人）は勅によってこの経を講じた。天皇の尊信は特に篤くて、「金光明経」と共に奈良朝文化の源泉をなした。東大寺の建立、大仏（盧舎那仏）の造営等はすべて、華厳経の芸術的表現である。この芸術的に法界の美徳を観察すると云うことは、華厳経の理想――全宇宙を願行成就の仏身と見る――体現の一形式である。審祥を第一祖とし、良弁を第二祖とする我国の華厳宗は法灯次第に継承されて、高弁（一一七三―一二三二）凝然（一二四〇―一三二一）に至り、教理的に一般に紹介された。高弁は「華厳唯心義」一巻、「信種義」一巻等を著し、李通玄の学風を重

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

んじて実践躬行を唱導し、凝然は博覧強記の一代の僧で、摯著書等身と云われ、「探玄記洞幽鈔」百二十巻、「五教章通路記」五十二巻等華厳に関するもの二十四部を著して、東大寺に伝うる華厳の正風を恢復するに努め、爾後宗風振わず、徳川時代に行われた鳳潭（西紀一六五四―一七八三）の復興運動も功を奏せず、普寂徳門（西紀一七〇七―一七八一）次で該博卓抜の学識を以て華厳の疏章を製し大いに名声があった。然し一宗としては今は僅かに東大寺に法脈を伝うるのみである。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

寂滅道場会

第一　世界の喜び（世間浄眼品）

釈尊の正覚によって宇宙は一変し、一塵一草も無限の生命と力を得て、万有は新しい生活に入った。そして、万有は互に偕和してそこに何等の背反も撞着も見られない。この有様を諸宝の荘厳と、人天鬼神の讃頌とで表現してある。

釈尊は摩竭提国の寂滅道場に於て、始めて正覚を成就せられた。

その時、大地は金剛の如くに、周囲は宝華に飾られ、瑞雲は万象を覆うてさながら大海原の如くであった。宝幢、華鬘は光明に輝き、空には七宝の網が張られ、宝の雨は小やみなく降り続いた。仏の神力によって世界は限りなき霊光に照らされて広博厳麗の様は云いようがない。また菩提樹は空高く

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

聳えて、瑠璃の幹には妙宝の枝葉が垂れて重なれる雲の如く、宝華はその間に咲き乱れ、枝葉の間からは妙なる音楽が漏れて仏徳を讃えている。樹下の獅子座はまた海の如く広がり、諸の宝華に飾られ、流光は雲の如く、不思議の霊能を現わして一念の頃に法界に充満した。

釈尊は実にこの獅子座上に於て万有の真実相を体解せられたのである。その智慧は三世の諸相に通達し、体は宇宙の万象と現われ、その音声は一切の世に透徹して共に窮極のないことは虚空のようである。また常に偏頗の心を捨てて等しく一切の生類を正覚の境地に導き、宝座を立たずして一切生類の能力に相応しい教えを説いて、諸の痴闇を除いている。即ち一切の世界に身を現わして三世透徹の智慧の光を十方に輝やかし、仏の霊徳に基づく永遠不滅の真実道を説いて、生類を済度せらるるのである。仏は座を立たずに広く教化を行い、また諸仏の大会に参ずるも、身は宇宙法界に遍満するが故に、往復去来の相を示す必要がない。

時に十方の世界より微塵数の如く多くの大聖者が出現して釈尊を囲繞した。普賢、普徳、智光、普明師子、普勝宝光、智慧光照などがその主なものである。これ等の聖者は往昔、盧舎那仏――釈尊――と俱に学行を精進された宿世の善友で、既に諸の学行を成就して智慧の眼は三世の万有を見透し、弁才は海の如く広く、普く諸仏の霊徳を説いて生類の能力に応ずる教化を全うするものである。この聖者達はよく一切万有の真実相に体達するが故に、念々に仏道を成就して一切の真理を体得し、一行の成就によって一切の聖徳霊能を成熟して、無上の大智大願を完うし、仏の大悲行、福徳、十力等を得て、生類の教化に於ても万有の認識に於ても仏と異るところはない。故に一切の世界に遊び、永劫絶

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

ゆることなき「救いの智慧」をもって、国土を浄化し、生類を済度している。

また微塵数の金剛力士は釈尊を守護し奉った。堅固光耀力士、日光耀力士などがその主なるもので、永劫の昔、諸仏侍衛の大誓願を発し、無量の徳能を具えて仏の護衛に任じている。また微塵数の浄荘厳、宝積光明、吼音声など云う道場神、摩尼光竜、難荘厳竜など云う竜神、浄華光、善思光明、雑華荘厳など云う地神、雑華雲、雑種光、浄勝光など云う樹神、光炎、栴檀香など云う薬草神、勝味、華浄、善力など云う穀神、普流、勝徊復、洪流声など云う河神、宝勝光明、普涌浪、海音声など云う海神、熾然光蔵、広明耀、照除諸冥など云う火神、無礙照明虚空、散須弥、持世界など云う風神、無辺深広、起風など云う虚空神、善住、充満など云う主方神。妙光、善観衆生など云う主夜神、大悲豔光、光明善照など云う主昼神、羅睺羅王、勝集天女王など云う阿修羅神、持法堅固、勇猛浄眼など云う迦留羅王、離愛慢音、善愛など云う緊那羅王、猛光、善慧など云う摩睺羅伽王、能除恐怖、無量浄眼など云う鳩槃茶王、毗沙門、荘厳勝軍など云う鬼神王、月天子、星宿王天子など云う月身天子、日天子、明眼天子など云う日天子、帝釈天、勝者など云う三十三天王、善時、普荘厳など云う夜摩天王、善喜、金剛善曜など云う兜率王、最上雲音、照方など云う化楽天王、自在転、精進慧など云う他化自在天王、随世音大梵、尸棄大梵など云う大梵天王、楽光、深妙音など云う光音天子、浄智王、世慧音など云う遍浄天、法華光、無垢浄など云う果実天子、功徳浄眼、不動光音など云う浄居天等皆来会して、その壮厳雄大は言葉に尽せない。

これ等宇宙万有を代表するものは本来、清浄なる平等一相で、悉く仏の真証を現わしている。已に

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

仏の真証の中にあれば各々もまた一切の煩悩を離れて、ゆくりなく仏の尊容を拝し、日夜に精進する学行によって、仏の光明に浴して各々真理を体得した。かくして仏の霊徳を讃える歌頌は響いた。

始めに善光海大自在天は、

『縦横無尽の関係をもつ一切万有は、総て仏の身となり肉となる、仏の証りは執すべき相、起すべき特殊性はない。

仏はただ万有の協調偕和の帰一として世に表わるる。一切世俗の智慧は仏を認識することは出来ぬ。愚痴の闇を除いて、始めて無上の智慧の台に超昇する。仏の霊徳は思議し難い、生類これを見れば煩悩滅び、無礙自在の尊容を見たてまつれば無量悦楽の心が生ずる。』

果実天は讃えて、

『万有真実の相は無差別にして主体はない。仏は生類教化のために現われ、神秘の力もて善く一毛孔の処に、無上清浄の法を演説し給う。』

浄智天は云う、

『仏の教化は時に限りなく、光は広く十方を照らす、清浄の法界は万有のあるがままなれば、無差別にして最上である。』

光音天は言う、

『如来の智慧は限りなく、行には差別がない。これを見奉れば垢穢を去る。』

大梵天は讃えて、

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

『法王は真理の堂に安住して光明の照らさない処はなく、諸法は相和して異相がない、これを海潮音の法門と云う。』

化楽天は歌う、

『手段を尽して仏を求むれども仏は居られない、これを十方に訪ねてもいまさず。
法身は示現するも定在がない、かくて我等は出世自在の仏を見る。』

兜率天は言う、

『世間最高の主は群生を憐み苦を除き、人観たてまつらんと楽わば、み姿を現わして高嶺の月の如くである。』

夜摩天は讃えて、

『人一たび仏を見ればよく総ての煩悩を断ち、諸の魔事を除く、これを清浄の妙境と名づける。』

帝釈天は言う、

『もし暫くでも仏を憶念すれば一念尚お永く罪の世界を脱れて、智慧は日の光の如く痴闇を滅さん。』

日光天は言う、

『愚昧の人は盲目である。この悩めるものの為めに浄眼を開き、彼等に智慧の灯を示して、仏の清浄身を見せしめらるる。』

月天子は言う、

『一切の存在は空の如く実体はない、心清浄なるものは仏の光明を仰ぎ、その教化を受くる。』

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

毘沙門夜叉王は歌う、

『凡ての生類は罪深うして永劫に真理を見得ない。仏はその流転の苦を憐みて世に現われ給う。』

金剛力士は歌う、

『仏の無礙の霊能は一切法界に充満している、真理の光は際崖なく、一切生類の前に現わるる。』

最後に普賢は一切の会衆に代って、

『仏は吾等が、この獅子宝座の上に見奉るように、一分の微塵の中にもいらせらるる。十方一切の世界は仏の等しく護らせらるるところで、仏のみ声は一切に徹して聖者の学行を演べらるる。

念々に生滅変化する万有の真実相は、局限された認識の及ぶところでなく、唯一切の制限を離るるもののみ見ることが出来る。

仏は一音をもって一切の学道を説いて、一切の法を漏らすことはない。』

時に仏の獅子座より海慧超越、無量獅子吼など云う無数の菩薩が湧出して、諸の供養を捧げ、一切海慧自在智明王菩薩はこれ等の聖者を代表して、仏の正覚を讃える。

『仏は万有の真実相をさとって、一切の拘束を離れ、浄きことは虚空の如くである。永劫の間の学行は成就せられて、今や一切の迷いを除く為めに種々の教化を施し、生類に最上のみ教えを説き、これを行わしめらる。仏陀は獅子の宝座にいまして、よく一切の世界に現われて、限りなきみ教えを顕揚せらるる。』

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

斯く宇宙を挙げて仏の正覚を讃仰し、世界は六種に震動した。諸天は妙華、宝雲を雨ふらして仏に供養を捧げた。今や仏の正覚によって万有は、各々光明の世界を見出し、そこに何等の制限を受けぬ麗しい正覚の新天地は展開された。

第二　信仰の対象（盧舎那品）

普賢（聖者）　華厳経の理想人格で、経中に現わるる幾多象徴的人格の実行的方面は悉くこの人に統摂される。故に華厳経は普賢に終始するの観がある。

普荘厳童子（求道者）　華厳経の三童子の一で盧舎那仏の前身。信を人格化せるもの。唐訳には大威光童子と云う。

世界を挙げて仏身とするのが華厳経の本意であるが、それでは余りに散漫で帰一がない。故に仏の最も円満なる相を示して、信仰の対象を表示するのが以下の四章である。この章には主としてその住む国土を明らかにし、仏身の宇宙に遍満することは多く化現説を以て表わす。これは直に我れに仏身を体験せんことを教ゆるものである。

仏が正覚を成就せられたのを見て、群り集った大衆は心に念うよう、

『仏陀の心地はどうであろう、仏の世界はどんなであろう、智慧、力、光明、音声などの仏の聖徳霊

SAMPLE
Shoshi-Shisui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

能、利他教化の対象、方法、効果は如何であろう。また正覚を成就さるる迄聖者として修められた学行と心地はどうであったろう。仏の慈悲にすがってこれ等の真相を知りたい』と。

この念いは自然の声として種々の供物より発せられた。

時に仏はみ口の一一の歯の間から微塵数の光明を放って、十方の世界を照らされ、その世界の人々は光の中に蓮華蔵世界を見ることが出来た。

蓮華蔵世界の周囲には十種の世界があって、その中に各々仏の世界がある。東の世界を浄蓮華勝光荘厳、仏国を衆宝金剛蔵と云い、種々の宝雲に覆われ、仏を法水覚虚空法王という。南の世界を衆宝月光荘厳蔵、仏国を無量光厳と云い、種々の宝雲に覆われ、仏を普智光勝須弥山王と云う。西の世界を宝光楽、仏国を一切勝現と云い、種々の楼閣雲に覆われ、仏を香光王功徳法荘厳と云う。北の世界を瑠璃宝光充満蔵、仏国を化青蓮華荘厳と云い、種々の宝雲に覆われ、仏を無量智慧音王と云う。東南方の世界を閻浮玻璃色幢、仏国を宝荘厳蔵と云い、種々の獅子座雲に覆われ仏を一切法灯無所怖畏と云う。西南方の世界を普照荘厳、仏国を香勝離垢光明と云い、種々の宝雲に覆われ仏を一切衆生普歓喜王と云う。西北方の世界を善光照、仏国を意入と云い、種々の蓋雲に覆われて仏を普門智慧明浄音と云う。東北方の世界を宝照光明蔵、仏国を香荘厳楽勝蔵と云い、同じく宝雲に覆われて仏を無量功徳海と云う。下方の世界を蓮華妙香勝蔵、仏国を宝獅子光と云い、種々の宝雲に覆われ仏を明照世界と云う。上方の世界を雑宝光海荘厳、仏国を楽行清浄と云い、宝雲に覆われ仏を無礙功徳称離闇光王と云う。

SAMPLE
Shoshin-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

これ等十方の仏はその国の無数の聖者を従えて、寂滅道場に来り、各々獅子座に坐して一切の毛孔より光明を放ち、生類を教化して盧舎那仏の真証海のものとせらるる。

諸の聖者はこの仏の教化を讃えて、

『仏は諸の生類を教化せんとて、具さに清浄の学道に努しみ、救いの慈悲は一切の万有に光被して限りがない。教化の方法は一毛端の処によく仏の世界を表わして、よく生類の憂悩を除き、各々の微塵に現わるる身は、また一切を浄化して一念に一切を成就する。』

時に釈尊は凡ての大衆に仏の限りなきみ教えを知らしめんと、眉間の白毫相より光明を放たれた。その光は広く一切の世界を照らして、生類に甘露の雨を注いだ。また光明の中に宝香を鬚とし、黄金を台とする大きな蓮華が現われ、その葉は遍く一切の法界を覆うている。この蓮華と共に仏の額より一の聖者が現われた。その名を一切法勝音と云い、微塵数の聖者と共に仏を繞って深重な敬意を表し、そして勝音は台に聖者達は鬚に座を占めて、次第に仏の聖徳を讃える。

始めに勝音は、

『仏のみ体は法界に充満し、現に菩提樹にいまして、よく一切生類の望みにまかせて種々の相を現わさるる。』

師子炎光奮迅音は讃えて、

『仏は清浄なるみ教えを説いて、一切の世界に洽く、普賢大士のみ声も一切の世界に満つる。盧舎那仏はあらゆる妄染の中にあって秋毫の動揺もなく、常に自ら成就せる学行を説かるる。三世の仏もま

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

た声をもって生類を教化する』と。

かくてこの寂滅道場に於けると同じ瑞相は、宇宙至る所の世界に現わされた。

普賢大士が仏のみ前に於て浄蔵三昧に入られると、十方一切の諸仏はみな普賢の徳を讃えて、

『よい哉、汝がいま浄蔵三昧に心を凝しているのは、盧舎那仏の本願力と、汝が修する大願との力によってである。即ち一切の生類の能力を察し、方法を考えて教化を完全ならしめんが為めである。』

かくて普賢はこの三昧を成就して、法界の真理を証り、教化の智慧を得た。その時十方の仏は右手を伸べて普賢の頭を摩で、諸の聖者はこの瑞相を見て更に普賢を尊敬してその徳を称揚した。

普賢は自然界、生物界、法界の動相、生類の希望及び仏の境地などの観察を已って大衆に告げらるるよう、

『万有の実相、法界の真理、証りの智慧、仏の霊徳、教化の智慧などは総て認識の境ではない、然し予は生類を仏の智海に導く為めに、仏のみ力の下にこれを説こうと思う。』

かくして普賢が三昧より出らるると共に、一切の聖者は無量の三昧、諸の学行及び教化法などを完うすることを得た。これは一切の仏の世界に於ける聖者も同様である。

時に世界は六種に動き、生類は平和と悦楽を得、道場には十種の宝王の雲が漲り、仏の光明は普賢の徳を歌頌して、

『普賢は悉く一切の仏の世界にあって獅子座の上に坐し、凡ての行為は仏の願底を尽すが故に法を説くに障礙なく、生類を教化するに自在である。その身は虚空の如く真理の上にあって国土に依るので

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

ない、唯、諸の生類の意にまかせて、普く一切に示現する』と。

時に普賢は更に大衆の信念を堅くする為めに、仏の徳を讃えて、

『仏の霊徳は十方に遍満してよく無量の生類を教化する。仏の境地は幽玄にして思議し難い、多くの人は理想低く、万有に迷うて仏の真証を体得することが出来ぬ。ただ信念の固い常に善友に親しむもののみ、仏に護られて仏智を体得する。

一切の世界も仏も共に、我が身内にあって互に偕和している。我は一々の毛孔に仏の境地を現わすことが出来る。汝等静かに観察せよ。』

更に言葉を続けて云うよう、

『仏子よ、世界には次の十種の事項を始め無量の事項がある。

（一）一切の世界はあまたの因縁の和合によって成立する。（二）世界の依所は或は虚空或は仏の光明、或は普賢の願力など千差万別である。（三）世界の形状はまた或は方形に、或は円形に或は渦巻くなど様々である。（四）世界には宝華、珠香、光明、仏身など種々の体がある。（五）世界には或は雲、或は生類の行業、或は三世の仏、普賢の願力など種々無量の荘厳がある。（六）世界の清浄の相はまた無量で、善友に親しみ、諸の波羅蜜を修め、正しい力を養うなど微塵数に等しい。（七）世界には無量の仏が出でて種々の相を示さるる。（八）世界の持続する時間に就ても長短無量である。（九）世界の変化は住するものの意志行為に依る。（十）たとい染浄相分るる如きも実は互に鎔融して、そのもの自身には染浄の差別はない。』

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

蓮華蔵世界と普荘厳童子

普賢は仏の住処である蓮華蔵世界に就て述べらるるよう、

『諸の仏子よ、蓮華蔵世界は盧舎那仏が往昔、聖者として一切の時、一切の処に於て修せられた学行によって築かれたものである。この世界は微塵数に等しい風輪によって支えられている。最下の風輪を平等と云い、次を種々宝荘厳と云い、乃至最上の風輪を勝蔵と云い、その上に香水海がある。この香水海の中に香幢光明荘厳と云う大蓮華があって、蓮華蔵世界を支えている。その周囲に金剛囲山が聳え、その大地に言葉に尽きせぬ香水海がある。一々の香水海にまた微塵数の香水河があって宝華に覆われている。かく蓮華蔵世界の各部は種々無量なる清浄の霊徳によって荘厳せられている。

仏子よ、この香水海の中に更に一つの香水海があって一の蓮華を生ずる。この上に仏の世界がある、更に無量の仏の世界は次第に相重って、その上にまた香水海がある。その中に善住と云う世界の集団がある、斯く次第に香水海と世界とが相重なっている。この世界の組織は十方皆同一で、斉しく盧舎那仏の法輪を転ずる処である。』

普賢はこれ等の世界に就て述ぶるよう、

『空中の雲は竜神の力によって現わるるように、一切の仏国は仏の本願によって築かるる。また巧みなる手品師が種々の業を現ずる如く、生類の業によって仏の世界は不思議となる。また画像は画工の手に成る如く一切の仏国は心の画師によって築かるる。』

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

普賢は盧舎那仏の過去の因行に就て述べらるるよう、

『諸の仏子よ、久遠の昔、勝妙音と云う世界があった。無量の宝はその中に満たされ、人は思念を食物とした。

その世界の須弥山にある大公園の東に炎光と云う大国があって、面積は三万里、人は皆神通を得ていた。園林の中にある大蓮華に一切功徳本勝須弥山雲と云う仏がいられた。炎光城の王子普荘厳童子はこの仏に帰依し十種の三昧を得て、仏の徳を讃頌した。父の愛見善慧王はこれを聞いて喜び、諸王大臣を始め無量の眷属と共に、仏を礼して種々の供養を捧げた。

時に仏は諸の生類を教化せんが為めに無数の経典を説かれた。普荘厳童子はこの経を聞き宿世の因縁によってあらゆる霊徳を具え、無限向上の菩提心を起しそして修行のさまを述ぶるよう、

「昔より幾度か耳鼻を捨て頭目手足を施して、専心、国土社会の進化に努め、永劫の間、聖者の学行を修めて仏国を荘厳した。太陽の光が色彩を鮮やかに示す如く仏智の光によって私はいま自分のもとの修行を知ることが出来た。」

この言葉によって無数の生類は悉く無限向上の志願を起した。

その時、仏は童子の成仏を予言して、

「たとい一国の中に於て修行するとも、それが限りがなければ、必ず真実智を体得することが出来る、恰度、予が成就した如うに。懈怠のものは仏の教化を解ることは出来ぬ。よく精進するもののみ仏の世界を開くものである。一切生類の為めに、永劫に苦行して生死の苦難をも厭わなければ、よく

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

大指導者となり得よう。我を恭敬し供養すれば汝は無上の学道を成就することが出来る。」

その時一切功徳本勝須弥山雲仏の寿命は五十億歳であった。この仏が滅して次に出世せられた仏を一切度離痴清浄眼王仏と名づけ、普荘厳童子はこの仏を拝して念仏三昧、普門海蔵三昧、甚深法楽三昧等を得た。次で仏の説かるる一切法界自性離垢荘厳経を聞いて、一切普門歓喜蔵三昧を得、一切万有の真理を体得することを得た。』

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

普光明殿会

第三　仏陀の名称（名号品）

文殊（もんじゅ）（聖者）　仏陀の智的性能を人格化せる者、普賢と並び称せられ、彼は実行、此は理解である。

釈尊の成仏は一切万有の成仏であるから、何ものとして仏の名ならざるはない。名体不離にして名はその徳を表示する。これ先に信仰の対象を概説したが、多くその国土に就て述べたから、ここには仏の体徳（身業）を明らかにし、次の二品と共に仏の円満な徳能を示して入信の基調を与える。

仏陀は摩竭提国の寂滅道場を離れずして、東南、約三里を隔てた尼連河の辺（ほとり）、普光明殿へ移られ

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

て、十方微塵数の聖者と俱にいられた。聖者は皆一切万有の真相に体達して、仏に亜ぐ境地に達していた。

時に聖者達は念ずるよう、

『世尊、願わくは我等を憐み、仏の世界の本体と生成と、その荘厳及び仏のみ教えと霊能と、そうして正覚成就の相とを示し給え。また求道者の仏の境地に至る程――十住、十行、十回向、十蔵、十地、十願、十定、十自在、十頂――と衆生の仏性を持続し煩悩を滅して、一切の愛欲を捨て、そうして真理を解らしむる聖者の学行とを示し給え、また仏の最上の境地と内在的一切の優越性と、外的各種の霊能を示し給え』と。

そこで釈尊は願にまかせて直ちに神通を現わし、十方の仏土を示された。

東方微塵数の国を越えて金色世界がある。その仏を不動智と云い、聖者を文殊師利と云う。南方に楽色世界があって仏を大智と云い、聖者を覚首と云う。西方に華色世界があって仏を習知と云い、聖者を財首と云う。北方に蒼蔔華色世界があって仏を行智と云い、聖者を宝首と云う。東北方に青蓮華色世界があって仏を明智と云い聖者を徳首と云う。東南に金色世界があって仏を究竟智と云い、聖者を目首と云う。西南方に宝色世界があって仏を上智と云い、聖者を進首と云う。西北方に金剛色世界があって仏を自在智と云い、聖者を法首と云う。下方に玻璃色世界があって、仏を梵智と云い、聖者を智首と云う。上方に如宝色世界があって仏を伏怨智と云い、聖者を賢首と云う。これ等の仏及び聖者は各十仏の世界の聖者と与に来会して、仏を礼し、供養を捧げた。

SAMPLE
Shoshin Shinsui.com